

果研ニュース

No.99(2006年6月)



ユズ幹腐病の病徴



ユズ幹腐病菌の子のうと子のう胞子

◆◆成果情報◆◆

ユズ幹腐病の感染時期と防除対策

那賀川上流の多雨地域で問題となっているユズ幹腐病の防除対策確立のため、感染時期の調査と防除薬剤の検討を行いましたので結果の概要を報告します。

病原菌は4月下旬から10月中旬まで飛散し、飛散量は梅雨期の6月下旬～7月上旬頃が最も多く、次いで秋雨期でありました。

また、病原菌の感染時期は5月から10月の間であり、そのピークは6月、7月であると考えられました。

各種の薬剤について防除試験を行った結果、生育期散布においてはキノンド水剤、ペフラン液剤25、シマンダイセン水剤、ヘルコートフロアフルなど、発芽前散布においてはICボルドー66D、石灰硫黄合剤で効果が認められました。これらの薬剤の一部は現行の地区防除暦にも採用されています。

また、地区防除暦に準じて殺菌剤を幹まで十分量散布した慣行防除体系区においても幹腐病に対する防除効果が認められました。

以上のことから、幹腐病発生園においては防除暦に準じ薬剤防除に努めるとともに（殺菌剤は幹まで散布）、畝土等による地力の改善、主枝更新による樹勢回復などの樹体管理技術を組み合わせた総合防除対策を講じていくことが望ましいと考えられます。
(病害虫担当 河野 由希)

カンキツせん定枝や果実搾りかすの堆肥化と施用効果



カンキツ園内外から排出されるせん定枝、果実搾りかす等の有機性廃棄物を再資源化し、園内あるいは地域内に還元し循環させる資源循環型カンキツ栽培体系を確立するために、カンキツせん定枝の堆肥化、せん定枝堆肥あるいはシイタケ廃菌床を副資材に用いたスタチ及びユズ搾りかすの堆肥化とその施用効果について検討しました。

カンキツせん定枝の粉砕物を堆肥舎内で堆積、散水、切り返すことにより完熟堆肥の作製が可能でした。また、完熟途中のカンキツせん定枝堆肥や粉砕したシイタケ廃菌床にスタチ搾りかすを混合することにより、スタチ搾りかすの完熟堆肥化が可能となりました。さらに、ユズ搾りかすについてはスタチと同様に処理に加えて窒素を0.5%程度添加することにより完熟堆肥化が可能となりました。これらの堆肥をカンキツ園に施用した結果、地力や保肥力の向上、リン酸の下層土への供給等土壌の化学性の改善が図られました。

(常緑栽培種担当 森 聡)

◆◆新しい研究課題◆◆

平成18年度から取り組む新規研究課題を紹介します。

①超音波を利用した果樹のヤガ類被害防止技術の開発

ヤガ類は天敵のコウモリの発する超音波を感知し逃避行動をとります。これをヒントにヤガ類の忌避にもっとも効果の高い周波数、パルスパターン等を解明することにより、圃場で利用可能な超音波発生装置を開発し、全く新しいヤガ類被害防止技術を開発します。
(平成18年度農林水産研究高度化事業採択)

②スタチ晩生系統の産地適応性試験と普及に向けた取り組み

県内から選抜した晩生系の「上板6号」を、貯蔵用として産地での適応性検討について現地試験を開始します。

③スタチの長期貯蔵技術の確立

高温予措を含めた予措方法の改善と冷温高湿庫を利用した長期貯蔵試験を行い、長期貯蔵技術を確立します。

④高糖系温州ミカンの隔年交互結実マルチ栽培技術の確立

隔年交互結実とマルチ栽培という特殊条件下での結実管理、枝梢管理、土壌管理などの栽培技術の確立を行い、貯蔵温州ミカンの高品質ブランド化に寄与します。

⑤ナシ産地維持のための早期成園化技術の開発

老木化が進む「幸水」の対策として、改植後の未収益期間を短縮する技術開発を行います。

⑥ブドウ加温栽培における暖房費低減技術の確立

「デラウェア」の早期加温栽培は生産費に占める暖房費の割合が高いことから、燃料消費低減に効果のある加温空間制限法を実用化技術として確立します。

⑦ナシせん定枝の簡易炭化及び炭化物の土壌施用による安定生産と品質向上

ナシせん定枝を簡易に炭化する装置を開発し、作成炭化物を園地に還元することにより土壌改良を図り、生育促進や品質向上、廃棄物の適正処理をすすめます。

◆◆トピックス◆◆

ナシ園でフタモンマダラメイガが発生！



昨年、ナシ園でこれまで見られなかった虫が散見されたため、京都府立大学吉安 裕教授に同定を依頼した結果、蛾の一種のフタモンマダラメイガであることが判明しました。イモムシ状で大きいもので体長約1cm。ナシに寄生し、樹皮下の形成層付近を食害します。本種はカキの害虫として知られていますが、ナシでの発生は稀となっています。

今後、ナシ園での被害および発生の実態調査を実施する予定です。

(病害虫担当 中西 友章)

スタチにおける銅水和剤の汚れとかいよう病に対する残効調査

果実の汚れは、ICボルドー66Dの50倍液、100倍液、クレフノン200倍加用ドイツボルドーAの1000倍液は6月14日、ICボルドー66Dの200倍液は6月24日に散布すれば、収穫開始の8月12日にはほとんど問題になりませんでした。一方、成葉の残効はICボルドー66Dの100倍液は59日、同200倍液は21日、クレフノン200倍加用ドイツボルドーAの1000倍液は10日程度でした。

以上のことから、6月上旬にICボルドー66Dの50倍液、6月下旬に同200倍液を散布すれば、防除効果が期待でき汚れも少ないことを確認しました。

今年度は、ハウス栽培における果実の汚れと防除効果について調査する予定です。

(高度専門技術支援担当 中島 光廣)



銅水和剤によるスタチ果実の汚れ

「あんぼ柿」簡易生産技術の実用化



あんぼ柿

県北部地域では柿の栽培が盛んですが、近年の市況は生産農家にとって非常に厳しいものとなっています。果樹研究所では早生柿の加工技術の研究開発に取り組む、四電エナジーサービス(株)の協力のもと、干し柿の一つである「あんぼ柿」生産技術を実用化することができました。

「あんぼ柿」には刀根早生や平核無の肉質が優れた品種を用い、さらにこれまで干し柿生産が困難であった10月上旬からの生産出荷を可能にする簡易乾燥技術を開発しました。使用する乾燥機も既存の機材に比べコンパクト化され、一般に販売される予定です。

「あんぼ柿」の軟らかくて緻密な食味は、老若男女を問わず好まれる特産品として、県内各産地での導入に向けて働きかけていきます。

(落葉栽培担当 福田 雅仁)

◆◆人の動き◆◆

1. 退職者

氏名	新所属	旧所属
吉田 正隆	退職	果樹研究所 (果樹担当、上板町駐在)
野口 清	退職	果樹研究所 (主査兼係長(総務担当))

2. 転出者

氏名	新所属	旧所属
金磯 泰雄	農業研究所次長	果樹研究所次長
遠藤 隆行	農業大学校助教授	果樹研究所科長(上板町駐在)

3. 転入者

氏名	新所属	旧所属
秋成 昇	果樹研究所次長(果樹担当、上板町駐在)	高度専門技術支援担当主任班長
今津 好章	果樹研究所主査兼係長(総務担当)	南部県民局企業振興部主査兼係長
松家 義克	果樹研究所科長(土壌肥料担当)	高度専門技術支援担当係長
福田 雅仁	果樹研究所主任研究員(落葉栽培担当)	徳島農林事務所農業支援第二課技術主任

4. 所内異動

氏名	新所属	旧所属
柴田 好文	果樹研究所次長	果樹研究所専門研究員兼科長 (常緑栽培種担当)
森 聡	果樹研究所専門研究員兼科長 (常緑栽培種担当)	果樹研究所専門研究員兼科長 (土壌肥料担当)
徳永 忠士	果樹研究所主任研究員 (常緑栽培種担当)	果樹研究所主任研究員(上板町駐在) (常緑栽培種担当)

5. 果樹研究所駐在(高度専門技術支援担当)

氏名	新所属	旧所属
中島 光廣	高度専門技術支援担当主任班長	高度専門技術支援担当主査兼係長
服部 弘明	高度専門技術支援担当主査兼係長 (上板町駐在)	高度専門技術支援担当主査兼係長
安宅 雅和	高度専門技術支援担当技術主任	南部県民局阿南農業支援センター 技術主任

◆◆お知らせ◆◆

【果樹研究所公開(参観デー)は県北分場において9月に開催】

果樹研究所ニュース No.99

平成18年6月発行

編集発行 徳島県立農林水産総合技術支援センター

果樹研究所 TEL 771-4301 徳島県勝浦郡勝浦町沼江
TEL 0885-442-2545 FAX 0885-42-2574

県北分場(上板町駐在) 〒771-1320 徳島県板野郡上板町神宅
TEL 088-694-2712 FAX 088-694-2526

印刷 (協)徳島印刷センター